



## ～ 外務大臣 林 芳正 氏 ご講演 「国際情勢と日本外交の進路」 ～

令和5年1月17日(火) 林芳正氏の講演会が開催されました。



2023年の新春を飾る講師には、岸田内閣の外務大臣、林芳正先生をお迎えした。林先生は、東大法学部をご卒業後、三井物産を経て大蔵大臣をされていたお父様の秘書として政治の世界に入れられた。ハーバードのケネディスクールで学ばれるなど国際感覚に優れ、ピアノも弾かれるマルチの政治家。ウクライナ戦争が勃発し、米中対立が深まる中、正念場を迎える日本外交のかじ取りの第一線に立たれている。講演の二日前に正月四日からの中南米歴訪などの外遊から帰国されたばかり、外遊の最後には米国で防衛大臣との2プラス2会合や総理と大統領の首脳会談に臨まれ、さらには国連で77か国が参加した法の支配に関する安保理閣僚級公開討論を主催された。日本倶楽部では初めてのご講演。

講演は、三井物産時代の中南米との個人的な繋がりに始まり、中南米には左派政権が多く難しいが、民主主義が確立してロシアのウクライナ侵攻にははっきりと批判的。何よりも日系人が多く、日本が大事にしなければならない地域だとのお話から始まった。続いて、ロシアのウクライナ侵攻を、冷戦期からの歴史を振り返りながらおさらいをされ、そういった中で国連改革が必要になっていること、今日のウクライナは、明日の東アジアだという問題意識をもって外交に当たらなければならないこと。日本外交の要である対米関係に関しては、米国一強でなくなった国際情勢の下、日米首脳会談においてバイデン大統領から、日本の防衛力増強や、対ウクライナ支援、G7議長国としてのリーダーシップなどに対して極めて高い評価がなされたこと。経済安全保障や、中国への毅然とした対応、北朝鮮問題など幅広い意見



交換が行われ、日米関係がこれまでになく緊密な関係になったとのお話があった。

質疑では、米国一辺倒ではない日本外交のありかたはとの問いに対して、米国は大国としてのふるまいから、とかく中小国の反発を買っている。日本は中小国の理解も得ながらG7の一員としてのしっかりとした外交を展開していく。対中関係では、経済関係での日米での比重の違いなどから、自ずとスタンスに違いもあるが、その辺は、米国のブリンケン国務長官もよくわかっている。グローバルサウスの中には、米国に直接物を言いにくい国もあり、私のところに話しに来たりする。日本としては、彼らと同じ目線での信頼関係を築き、そういった国々の意見を代弁してあげることが大切だとのお答があった。

ウクライナ戦争の見通しに関しては、ロシアがまさかと思われていたウクライナ全土の侵攻という挙に出て全く読めなくなっている。ブチャの虐殺事件などもあって、ゼレンスキーも引けなくなっている。欧米にはウクライナ支援疲れも出てきている。もうしばらくして戦線が膠着すれば見えてくるかもしれないとのお答えがあった。

日本は大国と言えるのかとの問いに対しては、防衛費を倍増すれば、軍事的には世界第3位の大国になるが、その場合でも日本の立ち位置についての海外での認識に留意する必要がある。昨年のアフリカ諸国との会議でチュニジアの大統領から、60年前には日本と一緒だったのに、今日こんなに差がついてしまった。日本から学ばなければならないとの発言があった。海外からは日本はなりたい国と見られている。そういった目線を大切にしながら、きめの細かい外交をしていくことが必要だとのお答があった。(T.M.)



### ～コロナ感染症対策について～

コロナ感染症の流行もようやく終息が見えてきました。長い間ご協力ありがとうございました。5月の連休明けから、政府もコロナ感染症の感染症法上の位置づけを5類相当(インフルエンザと同等)に変更することとしております。日本倶楽部では、これからも状況の変化には十分注意しながら、当面は、政府の方針を踏まえ5月連休明けから以下のように活動を平常に戻したいと思います。

- ・館内でのマスク着用はご判断によることといたします(密になるような場合のマスク着用は推奨されます。)
- ・食堂、午餐会での座席間のパネルは取り外します。自由にご歓談ください。
- ・総会後等の会員懇談会(立食パーティー)は再開します。
- ・その他、2月にお知らせしたとおりといたします(午餐会、講演会の人数制限撤廃等)。
- ・入口での消毒用アルコール設置は続けます。検温は、ご希望の方には実施します(体調の悪い方は、入館をご遠慮ください。)
- ・見学会、出光美術館鑑賞会等の活動も集会委員会等で再開を、検討、協議中です。

以上ご連絡いたします。ご自愛のほどお願いいたします。